

2018年12月23日

クリスマス第一礼拝説教 同僚・ペテル教会

博士たちを導いた星

(マタイ2:1-11)

きょうは一年に一度の、同仁学院とペテルキリスト教会との合同のクリスマス礼拝です。この朝集まっている皆さまは、一番若い方は、と言うよりも小さなお友だちは幼稚園の年少のお友だちですね。では、お話を始めます。

一、東方の博士たち

マタイの福音書2章1節に「イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」と書いてあります。

博士さんたちは、お勉強が大好きで、頭がよくて、いろいろなることを知っていました。博士さんたちは、イエスさまが生まれられた、ユダヤのベツレヘムから遠い場所に住んでいました。博士さんたちは、星の動きをとでもたいせつに考えて、観察していました。「おやおや、いつもとちがう星が出ておる。何じやろう」と博士が言いました。すると、もうひとりの博士が言いました。「何でもユダヤの古文書によれば、救い主がお生まれになったときに、不思議な星があらわれるそうよ」すると、三人目の博士が言いました。「これはすごいこ

とじや。ユダヤまで行き、たしかめてこようではないか」と。今お話したことは、聖書には書いてありません。想像です。こうして遠い東の国からユダヤのエルサレムに向けて旅に出ました。

二、ヘロデ王

エルサレムに着くと、そこには性格の悪い、疑い深い王さまがいました。名前はヘロデ王です。とても怖い王さまでしたから、王さまが「アッハッハ」と笑うと、まわりの家来たちも「ハッハッハ」と気を遣いながら笑いました。王さまが黙ると、周りにいる人たちもシーンと静かになりました。王さまのきげんが悪いと、家来たちの神経はピリピリしました。ヘロデ王は人を信用しませんでした。奥さんのことも信用しませんでした。息子たちのことも信用しませんでした。そのヘロデ王に、博士さんたちは聞きました。2節です。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」と。この言葉に、ヘロデ王はびっくりしました。王さまは心の中で思ったはずですよ。「ユダヤ人の王はわしじや。だのに『ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか』だと。とんでもないことじや」と思い、恐れをいだきました。そうしますと、ヘロデ王が恐れたので、家

来たちも恐れしました。そして、エルサレムに住んでいる人たちもみんな恐れしました。「王さまが怒ったら、何をするか分からない」と思ったのでしようか。ヘロデ王は、エルサレムに住んでいる頭の良いユダヤ人たちを集めて聞きました。「キリストはどこに生まれることになつてゐるか」と。すると、学者たちはすぐに答えました。「ユダヤのベツレヘムでございます。聖書に、そのように書かれてゐるからでございます」と。ヘロデ王はとても頭の良い王さまでした。博士たちを呼んで、聞きました。「先生方。先生方はりっぱなお方じや。ひとつ、わしに教えてほしい。先生方が星を見たのはいつ頃でしたかな？ わしもユダヤの王としてお生まれになった方を拝みたい」と。ヘロデ王さまは、ほんとうに救い主を拝みに行きたいと思つたのでしょうか。いいえ、ほんとうは「幼子を殺しに行きたい」と思つていました。

三、星に導かれて

さて、不思議なことが起こりました。これまで博士さんたちを導いた星が、再び動き始めました。そして、ある家のところまで来ると、ピタッと星の動きが止まりました。はやり、この星はふつうの星ではありません。博士さんたちを救い主のもとに導く、特別な星でした。博士さんたちは、幼子イエス・キリストを見て、とっても喜びました。その

喜びが、どれくらいであったのか、聖書を見ると分かります。11節です。「そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」博士さんたちは幸せだったと思います。たいせつなものをささげられるお方と出会ったからです。

四、博士と私たち

同仁学院の皆さまは、他の子が経験しないような、たいへんなところを通じてられました。私は願うのです。博士さんたちがたいせつなものをささげられるお方と出会つたように、皆さんにも出会つてほしいと。そのお方は、神が人となられ、私たちが受けなければならぬ、聖なる神さまからの罰を受けてくださったイエス・キリストです。また、職員の方々を思うときに、祈られます。ほんとうの親であつても子供を育てるのはたいへんなことです。そうであるのに、心の深いところに傷を負っている子供さん方を支えていくのは、たいへんなことです。ですが、その労苦は、やがて何らかの形で、感謝と喜びにつながります。そういうところに、目に見えない神、すなわち私たちが目をもつてしても、心をもつてしても捉えることのできない神さまが見えるようになるのだと思います。